

龍馬がのこしたもの ―坂本龍馬―

美和子は、三年生のころから図書館で借りる本はたいいてい日本の歴史上の人物の伝記だった。織田信長はもう三回読んだ。徳川家康はそれほど好きではなかった。最近是新撰組の沖田総司がお気に入りだった。六年生になってからは、家にある父の歴史の本を読むようになっていた。

この夏休み、先生から社会科の宿題が出た。

「神戸に關係のある課題を見つけレポートをまとめてみましょう。どんなことでもいいから。」

美和子は、真っ先に歴史上の人物をレポートしようと思った。しかし、意外と「その人」がうかんでこなかった。そんな時、長崎に住んでいるいとこの桃々のことを思い出した。桃々は、中学三年生だ。

毎年、美和子が長崎へ行ったり桃々が神戸に来たり、順番に行き来していた。今年は桃々の番だ。美和子は桃々が好きだった。陸上部でスポーツ万能、勉強も熱心だった。「桃々みたいになりたい」と美和子はあこがれていた。

美和子は宿題のことを桃々に電話で話し、だれかい人がいないか相談した。

美和子は長崎に行った時、桃々にいろいろなところへ連れて行ってもらったことを思い出した。出島のあとが思ったよりせまいのおどろいた。大浦の天主堂でキリシタンのことを知った。原ばく資料館では平和の大切さを学んだ。長崎は歴史の宝庫だった。

「ねえ、坂本龍馬はどうかしら。」

と、電話の先で桃々が言った。

「坂本龍馬は私の好きな沖田総司の敵役よ。」

と、美和子が言うど、

「ははは、そうね、美和は沖田総司のファンだったね。でもね、龍馬もいいわよ。」

美和子は、「桃々は坂本龍馬が好きなんだな」と思った。そして、ちよつと不機げんに言った。

「だって、龍馬って、神戸と関係あらへんでしょ。」

「美和は知ってる？　神戸の海軍操練所って。どこかに史せきがあるでしょ？」

「ううん、知らない。」

「じゃ、勝海舟は知ってるでしょ。」

「その人は知ってる。」

「神戸の海軍操練所はね、勝海舟っていう江戸の旗本が生みの親なの。海舟が神戸に海軍操練所をつくらうって言い出して、龍馬はそれに協力したの。だから絶対関係あるはずよ。」

「そうかな……。」

「来週、神戸に行くから、お姉ちゃんも調べとくよ。美和もちよつと調べてみな。」

桃々は、そう言って電話を切った。

「坂本龍馬か……。」

あまり乗り気ではない美和子だったが、桃々がせっかく言ってくれたのだし、とりあえず調べてみようと思った。

図書館で「勝海舟」と「坂本龍馬」の伝記を借りてきて、美和子は一気に読んだ。幕末の歴史は、好きな沖田総司の生きた時代なのでくわしいつもりだったが、勝海舟や坂本龍馬の仕事は、やはり知らなかった。沖田総司は新撰組の一員として活やくしたが、この二人は明治維新にはなくてはならない存在だったということがわかった。美和子はお父さんに何か本を借りようと思った。

「まったく美和子は歴史好きだな」とお父さんは、感心というよりあきれながら何冊かの文庫本を持って来てくれた。「竜馬がゆく」という司馬遼太郎さんの本だった。

「美和子にはまだ難しいだろう。ちょっと関係がありそうなところを教えてあげよう。」
そう言ってお父さんは、龍馬が勝海舟に初めて会った時のくだりを話してくれた。

「当時、江戸で北辰一刀流のけん術を修行していた龍馬は、その千葉道場のおんぞう司重太郎が『旗本のくせに開国を声高に唱える勝海舟はけしからん、暗殺に行く。』』と言うのに、ひよこひよこついて行ったんだ。海舟の屋しきに暗殺に行って座しきに通された二人に海舟が『あれをごらんよ。』』と言って地球ぎを見せる。海舟には数年前に咸臨丸でサンフランシスコへ行った経験があったんだ。『あの青いのが海だ。』と海舟は言い、『世界のほとんどが海だ。だから海を何とかしなくちゃいけない。』』と言う。『イギリスのように海を家にするぐらいじゃなければいけない。』と二人をさとしたんだ。そして、『坂本君。』と言って自身の日本はん栄論をひろうした。なるほどと感心する龍馬とは逆に、重太郎はいよいよ海舟の開国思想にいきなり出し、わき差しをぬこうとした。その時、龍馬はパタッとたたみに平ふくし、『勝先生、わしを弟子にして仕あされ。』とこん願したんだ。」
おもしろかった。龍馬は、暗殺しに行った相手に、弟子にしてくださいとたのむのだ。

「ねえ、ねえ、それで、どうなるの？」

「海舟は軍かん奉行になって神戸に海軍の操練所をつくることを幕府に進言した。それが許されると、龍馬たちをつかってその準備をさせる。それで龍馬も何度もこの神戸に来たんだろうな。操練所の最初のぼ集では二百名近い人が集まったそうだよ。その中には、後の外務大臣になった陸奥宗光もいたんだ。」

「じゃ、何か神戸で起こった有名な出来事かなんか、ないのかな。」

「そうやな、龍馬は長いこと神戸におったやろうけど、長崎や京都みたいにな有名な出来事や事件があったわけやないからな。」

美和子はがっかりした。

その夜、美和子は図書館で借りてきた龍馬の本を読み返した。そこに、「この国を洗たくしてみせる」という龍馬の言葉を見つけた。美和子は、その言葉に興味をもった。

勝海舟にえいきょうを受けて、龍馬は次第に世界に目を向けるようになる。日本が国として貝のようからを閉じていたのでは、どんどん進んでいく世界に取り残されてしまうという思いが、龍馬の心の中でつのっていくのがよくわかった。そして美和子はふと思った。

「そういう龍馬の熱い思いは、きっとこの神戸でふくらんでいったにちがいない。」

美和子は明かりを消してねむりについた。夢に総司と龍馬が出て来た。

桃々が神戸にやってきた。去年は美和子が長崎に行っているから、二年ぶりだ。

「やっぱり神戸は都会だね。長崎よりよっぽど大きいわ。」

そう言いながら桃々は美和子の部屋に荷物を置いた。

「今年は受験勉強があるから、神戸にいるのは三日間だけだけどね。」

そう言って笑う桃々に、美和子は、

「来た早々で悪いけど……。」

と、例の龍馬の話をした。桃々はだまって美和子の話を聞いていた。そして、言った。

「美和、さすがだね。よく調べたね。総司か龍馬かなやnderのが、またいいね。私もね、調べたのよ。」

これは使えるわよ。龍馬と神戸。」

桃々は、長崎で調べたことを話してくれた。受験勉強でいそがしいのに、こんなことをさせて申し訳ないと思いつつ、美和子はそれを聞いた。

「龍馬の活やくはね、土佐や長崎、そして京都、江戸がおなじみだけど、神戸海軍操練所の設立とその塾頭として、神戸とも相当深いかかわりがあるのよ。この時期、勝海舟から世界のことや外国のこと、海のことや船のことを学んでいくうちに、龍馬の心に日本という国の将来に対する危機感のようなものがわき上がってきたんじゃないかしら。龍馬の国を愛する思いが次第に強まっていったのは、神戸にいた時にちがいないわ。勝海舟がわずか一年ほどで軍かん奉行を辞めさせられて、龍馬も神戸を去ってしまうんだけど、そのあと長崎や京都でやったことは、この時芽生えた『日本をなんとかしなきゃ』っていう思いからだと思うのよ。だから神戸は、日本を変えようとした龍馬の考え方が、生まれて育ったところと言えるんじゃないかな。」

「そうか」と美和子は思った。沖田総司もかつこいいが、知れば知るほど、龍馬が日本という国を愛し、新しい日本を夢見ていたということがわかる。

いつの間にか夏休みのレポートのことよりも、龍馬の生き方に美和子はひかれていった。そんな美和子に桃々が言った。

「じゃあね、美和、今度は私が質問するね。」

「えっ、なに、急に……。」

「もしもよ、龍馬が今の美和たちと出会ったら、何て言うかしら。」

「そんな……、わかるわけじゃないじゃない。」

桃々は、美和子の顔をのぞきこんだ。そして、

「じゃ、ヒントをあげるから想像してごらん。龍馬は神戸海軍操練所で、多くの仲間と新しい日本を夢見て、熱く議論をして過ごしたはずよ。」

「それは、そうだろうけど……。」

「龍馬は生きて明治維新をむかえることはなかったけれど、龍馬から強いえいきょうを受けて、同じ志をもっていた陸奥宗光が、新しい国づくりの中で第四代兵庫県知事となって神戸にもどってくるのよ。」

「えっ！」

「宗光が知事になって、龍馬と共に過ごした神戸の地に立って、どんなことを考えたんだろうね。」

龍馬の同志が兵庫の県知事となったことにも美和子はおどろいたが、それ以上に、「龍馬の思いが多くの人に受けつがれて今があるんだ」と強く思った。そして、

「どんなことを考えていたんだろう……。」「

という桃々の言葉を、小さな声で言ってみた。

「桃々姉ちゃん、なんだか、わかるような気がする。龍馬さんが夢見た日本の国に向かっていくかどうか、龍馬さんが、優しく私たちに問いかけてくるような気がする。」

「龍馬さん」と呼んだ自分に美和子は、はっとした。

「桃々姉ちゃん、これはきつと、龍馬さんからの宿題だね。」

美和子と桃々は顔を見合わせて、笑った。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複製して使用することを禁止します。